



2007年3月31日・4月1日 京葉山武大会トレイルO (千葉県)

ヨーロッパにひけをとらないテクニカルなテライン。最新のJSSOMによる詳細な地図と工夫されたコース。コース・セッターと競技者がガップリと対峙した京葉二日間大会トレイルOの部。



初日コースの一部。
テラインは九十九里浜の海岸砂防林。

スキル全開、蓮沼砂丘林の微地形を利用したテクニカルなコースに挑んだ第一日・・・

第一日は蓮沼海岸の砂丘林をめぐる2.5Kmのコース、13コントロールでTCは途中で設けられている。

防砂林の中のコントロールは総じて微地形を使用。ほとんどが補助等高線(1m)を併用して表現したこぶ、沢、尾根、テラスなどの特徴物(部)を読み取らなければならない。フラッグの設置位置も部分、下部、ふち、根元、あいだ・・・など極めて微妙。

ほとんどが目に見えない等高線との格闘である。自分のトレイルOスキルの引き出しを全部開いて取り組むこととなる。反面、さんざん微地形に慣らせておいて、極めて単純なコントロールを混ぜる「にくさ」もある。たっぴりと絞られた感じであった。(この日のコース・セッターは田中 徹)

太平洋を望むタイム・コントロール・アメリカは見えなかった



太平洋を望む砂浜でのタイムコントロール。漠たる砂浜に潜む等高線との勝負。(写真：上林)

TC(タイム・コントロール)はとてもユニークだった。林を抜けて海岸の砂丘地帯へ誘導され、眼前に広がる砂丘の等高線読みとなる。その向こうは太平洋のブルー！フラッグが海上に置かれてないのが幸いだった。

正解率が30%を切るコントロールもあったが、これはちょっとテクニカル過ぎたのかも知れない。また、オープン・クラスの制限時間が90分だったのはきつかった。このコースではPクラスと同じく120分は必要だろう。おかげさまで後半は、京葉大会ではおなじみのランニング・トレイルOとはなった。



やぶに隠れそうな微地形を読む千葉県九十九里浜の砂防林のテライン(写真：上林)

87名中、全問正解なしとは・・・

なんとTAクラスには87名という大勢の競技者が挑戦した。これは凄い。

成績を見ると、残念なことに全問(14p)正解者は現れなかったが、1pロスで八重樫集(東北大)と茅野耕治(ワンダラス)がわずかに2秒差で勝敗を分けた。

Pクラスでは木島が10位に

3選手が挑んだPクラス。林の中は概して路面が悪く、車椅子の移動は、運営者が考えていたよりハードであったと思われる。その中で、杉本、山口(拓)、岡本、木村選手などの熟練者を尻目に木島英登(大阪)が10位に入ったことは素晴らしい。



(写真：上林)



春真っ盛り。コースの途中では菜の花が咲き誇る。季節の楽しさをゆったりと肌で感じるのもトレイルOの魅力。(写真：櫻内)

満点者が3人も…

初日は得点数が順位に応じてばらついたが、この日は満点(15c+1TC=16p)が3人、木村治雄、茅野耕治、今井信親。以下15点が8人、14点が9人…とせめぎあう結果となった。

田中徹、木村治雄選手がWTOC2007日本代表に

今回の山武二日間大会の結果、ポイント制で競っていたWTOC(世界トレイルO選手権大会、8月ウクライナ)に出場する3人の日本代表選手のうち2名が決まった。(別記事を参照されたい)



見通しのよい沢の地形を読むまで、正解のフラッグはどれ？(写真：櫻内)

第二日はガラリと変わって…

2日目は、「さんぶの森公園」を使った典型的な公園コース。非常に限られたエリアでありながら、随所に工夫が見られるコースセッティングで、競技者は集中力をとぎらせることは出来なかった。

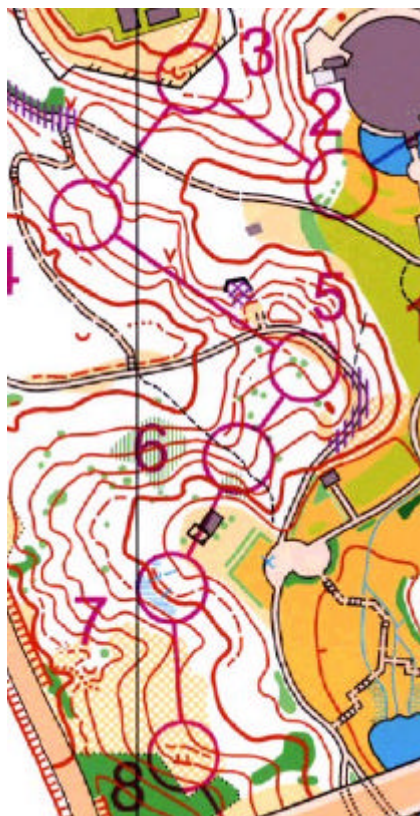
菜の花、チューリップなどの咲き乱れる中を巡るコースは15コントロールと1TC、距離は1.7Kmと適当で、楽しいものであった。

タイム・コントロールはビミョーな小さな沢のいくつかを正面から見ることで、地形の凹凸が消える効果を狙ったもの。

(コースセッターは吉村年史)

人間というのは悲しいもの…

前日と比べると比較的易しいコントロールが多かったようだが、これがときには逆効果を招き、「こんな易しいフラッグの置き方をするはずはない。キット何かウラがある…」と余計な猜疑心を招き、何人かはそのわなにはまった。悲しいかな人間の性、なかなか素直にはなれないものである。



2日目コースの一部。はっきりと地形のあるコース

良い地図、良いコース、そして参加者が良い大会をつくる

車椅子で参加した選手が今回は4名にとどまったが、トレイルO愛好者にとっては、楽しく幸せな二日間だった。

競技者も非常に多く、日本でのトレイルOの定着・普及が着実に進んでいることが実感される。新しいトレイルOのファンも生まれたことだろう。

地図やコース・プランニング技術の向上も大切だが、それを楽しむ競技者が増えることが、併せて大会をサポートし、発展させる役目を果たしている。

このような場を提供してくれた京葉OLクラブの皆さんのご努力と情熱に深く感謝するところです。有難うございました。

(こやま たろう)